

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	川上 一
主 論 文 題 名：室町殿歌壇の研究			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本博士論文では、室町時代中期に公武の頂点にあった室町殿（足利將軍家の家督）の和歌事績を整理・検討し、彼らが築いた作歌コミュニティ（歌壇）の実相解明を目指す。</p> <p>足利將軍が歴代和歌を好んだことはよく知られているが、彼ら為政者にとっての文芸は、従来は政事の余技とみなされる傾向にあり、その作歌活動の意義が専門的に論じられることは少ない。だが、武家権力の主催する歌会や歌合に列するのは、寵愛を受け栄達する一方、つねに粛清の危険に晒されている大名たちである。彼らは政事的に運命共同体でありながら、互いに様々な対立を抱える同床異夢的集団であり、歌会の開催はこれらを辛うじて繋ぎとめる紐帯となっている感もある。將軍が京都を拠点とし、公家文化に傾倒した室町時代はその傾向が顕著であり、彼らの構築した歌人社会、すなわち歌壇の実相を追究することが、室町期の社会構造の解明に繋がるといっても過言ではない。</p> <p>この視点から本論文では、歴代でも文化愛好で名高い室町殿、八代將軍足利義政（1436-1490）の治世を中心に、同時代歌壇の諸問題を三部十章にわたって取り上げ、政治権力と和歌との関わりについて、多角的に分析する。</p> <p>第一部「足利義政の時代」では、義政の和歌事績を検討する。先にも触れたように、義政は文化面の治功で有名である。歌人としても豊富な事績を残しているが、これに対する従来の言及は極めて少なく、専門的検討は皆無で、研究は半世紀以上進展していない。歌壇史研究においては、父義教（1394-1441）や息子義尚（1465-1489）と比しても立ち遅れており、室町殿歌壇の変遷を検討する上で、義政期は大きな空白となっている。こうした現状に鑑み、義政の歌人面に関し、伝記、現存歌、詠風という三つの側面から総合的な検討を行い、その全人的な復原を試みる。</p> <p>第一章「歌人足利義政伝」では、諸文献に見える義政の和歌事績を抽出し、政治動向と対照しながら、歌人としての生涯を考証する。</p> <p>義政の作歌歴は家督継承から晩年までおよそ四十年間にわたるが、彼の和歌への姿勢は、治世中におこった応仁・文明の乱（1467-1477、以下「応仁の乱」）を境に大きく変化する。乱前の義政のライフワークは、室町殿として、範たるべき父祖（特に義満）と同じ官位を辿り、政事・儀礼をこなすことにある。和歌についても同様で、その作歌活動は、勅撰和歌集執奏や晴御会参仕等、先例踏襲を期した修練に位置付けられる。</p>			

だが、大乱により既存の作歌環境が瓦解すると、不定期に開催される歌会の中で、義政は次第に歌壇の指導者的地位を担うようになる。歌会や着到和歌で、題者や点者をつとめたばかりか、武家被官への作法指導や、家司の詠作の添削まで行っており、その行動は従来の室町殿の立場を超えている。応仁の乱以後、室町殿の威信は急速に低下する。ただ、義政期までかろうじて権勢が保たれていたのは、義政個人の文化・文芸面での治績が、少なからず影響しているように思われる。

第二章と第三章では、義政の現存和歌・連歌資料を検討する。義政の現存歌には、家集や定数歌のほか、歌会資料等にみえる散在歌があり、総数は千五百首を超える。だが和歌事績と同様、これらに関する先行研究は僅少であり、各詠の真偽や年代、本文批判にいたるまで課題が山積している。義政の詠風を分析するためには、信頼に足る和歌本文を確定させる必要がある。

第二章「『慈照院自歌合』について」では、義政晩年の著作、慈照院自歌合につき、基礎面の考察を行う。これは、義政が過去の自詠百首を五十番の歌合としたものである。まず伝本につき、現存する二十二本を精査し、本文を二系統四類に分類する。その上で本文批判を行い、写本系第一類に属する宮内庁書陵部蔵桂宮本（函架番号：510・38、「歌合」所収）を最善本に位置づける。ついで自歌合収録歌と、その出典（定数歌や歌会）との照合を通して一部伝本の識語にある「文明十五年正月」という成立年代を検証する。収録歌のうち、最新のもの（成立下限）は、文明十四年八月十一日の歌会詠であり、これは識語の内容に矛盾しない。本書の成立が文明十五年正月である蓋然性は極めて高いと結論できる。なお文明十五年は、義政が東山殿へと引退した年にあたる。「過去の自詠を集める」という自歌合の制作には、これを記念する義政の意図を汲み取ってよいだろう。

第三章「義政の家集および連歌資料について」では、義政の家集と連歌資料の基礎的側面を検討する。家集は(1)慈照院殿義政公御集（部類家集）と(2)源義政集（定数歌集成）の二種を取り上げ、諸本の整理、収録歌の検証、善本の探索を行う。(1)慈照院殿義政公御集は、新編私家集大成にも収録される、最も著名な義政の家集である。これまでも道興の詠の混入が指摘されており、純粋な義政家集とはみなされていない。改めて全体を検証するに、従来の指摘以上の他人詠の混入が確認され、もはや義政の著作として読解利用には供せないことが決定的となる。(2)源義政集は、六種の定数歌を集めたもので、義政の真作として確実なものである。ただし、共通祖本の段階で脱落歌を有しており、諸本の異同も激しいため、現行の翻刻テキストでの読解には課題が残る。そこで、これと同内容の善本、肥前島原松平文庫本を紹介する。該本は定数歌六種を単独で書写した写本群であり、外題に「飛鳥井栄雅歌書写」という共通の注記をもつ。(2)源義政集の脱落歌も留めており、本文も良質であるため、義政詠の読解研究を行う上で基礎とすべき

資料といえる。なお、外題注記「飛鳥井栄雅歌書写」を有する写本は、連歌資料にも存在している。これらは従来、注記から飛鳥井雅親（法名栄雅）の著作として検討が進められているが、和歌資料の例からみれば義政のものである可能性が高い。そこで内容の再検討を行い、義政の文芸資料として新たに位置づける。

第四章「義政の詠風」では、ここまでの検討を基礎に、義政詠の通時的な読解分析を試みる。義政の作歌環境は、居所や社会の動静によって複数の時期に区分出来る。ここでは便宜的に、応仁の乱勃発までを「前期」（1447-1466）、乱中から義政の長谷岩倉隠棲までを「中期」（1467-1481）、隠棲以後を「後期」（1481-1490）とし、各期の詠風を検討する。義政詠の表現は、全体に当時の題詠論に基づいた穏当なものであり、同時代歌人と特別差異を感じさせるものではない。しかし、中期には「このごろはたえず野にふす^{ものふ}武士の山こゆる雁もつらぞ乱るる」（文明元年百首・46）等、「雁行の乱れ」の故事を用いて戦乱の実状を詠じるもの、後期には「年を経てめでこし春のつもりてや老ゆへ月の霞そふらむ」（公宴続歌・文明十四年二月十八日内裏月次御会・4057・春月）等、伊勢物語の古歌を踏まえながら、題詠の中に自らの老いを詠み込む例がみえ、環境に応じた作風の変化が看取される。そこには「義政詠」と呼ぶにふさわしい、個性の表出を認めてよいだろう。

以上、第一部の検討を通して、従来考察が不足していた足利義政期の室町殿歌壇の実態が概ね把握されるだろう。これをうけ第二部・第三部では、義政と同時代に存在した周辺歌壇に注目し、各問題について分析する。

第二部「正徹と招月庵歌壇」では、天理図書館蔵「招月庵詠歌・四十二番歌合」を検討し、室町期の歌僧清巖正徹（1381-1459）とその門弟が形成する招月庵歌壇の実態を追究する。本書は正徹晩年の事績に関わる写本で、「招月庵詠歌（正徹家集）」と「四十二番歌合（恩徳院歌合）」の二書からなる学界未紹介の資料である。

まず、第一章「天理図書館蔵『招月庵詠歌・四十二番歌合』の基礎的考察」で、本書の紹介と基礎的整理を行う。特に「招月庵詠歌」について、収録歌の他出状況を調査し、これが未知の歌会歌稿をもとに編集された新たな正徹家集であることを明らかにする。

ついで第二章「招月庵歌壇について一四十二番歌合から一」では、「四十二番歌合」に焦点をあて、その意義を多角的に検討する。四十二番歌合は、康正二年（1456）六月二十三日に開催された正徹判の歌合であり、草根集（正徹家集）の記述と照合すると、恩徳院なる寺院で開催された月例の歌合（月次歌合）のひとつとわかる。恩徳院は正徹幼少より縁の深い寺院で、草根集の記述から晩年まで同所の月次歌会や歌合に参加していたことが従来指摘される。ただ恩徳院の和歌興行を再検討するに、これは正徹はじめ招月庵歌壇が主体となって運営したものである。すなわち恩徳院の歌合は招月庵歌壇の歌

合であり、四十二番歌合はその本文を唯一収録した写本といえる。従来不明な点が多かった招月庵歌壇の構成を今に伝えるものとして、重大な価値をもつものであると指摘する。さらに出詠歌から招月庵歌壇の詠風を分析する。本歌合における正徹詠には、歌題の処理という点で、既存の枠組みにとらわれない自由な発想が看取される。いっぽうで門人たちの詠は、表現上の新奇性は認められるものの、題詠という側面では伝統的修辭の範疇にあり、正徹に匹敵ないし追従する動きはみられない。正徹の死後、招月庵歌壇が衰退に向かったことは周知の事実であるが、その要因には歌風を継承する者の欠如という課題が内在しているように思われるのである。

第三部「武家歌壇とその周辺」では、義政の父義教・息子義尚を含めた武家歌壇、及び隣接する禁裏歌壇に関する諸問題をとりあげ、それぞれ検討を行う。

第一章「文明十四年将軍家千首について」では、足利義尚が文明十四年（1482）八月十一日に主催した千首歌会（将軍家千首）を取り上げ、その初期歌壇の形成過程を追究する。義尚は、勅撰和歌集に替わる和歌打聞の撰集を企画するなど、義政以上に和歌を好んだ将軍として有名である。たが、そうした事業に至るまでの動向については従来不明な点が多い。義尚の事績を精査するに、その作歌活動が活発化するのには文明十四年である。そこには父義政の政務引退、歌道師範飛鳥井雅康の出家が影響しているとおぼしく、同年に開催した将軍家千首歌会は、自身の政務開始を明示するためのデモンストレーションとみられる。また、将軍家千首は後代にも写本によって伝わった歌書でもある。従来、検討された形跡が皆無のため、諸本の調査・本文批判を行い、天理図書館蔵本（請求記号：911・25 - イ43「武家千首 九条家本」）を最善本として指摘する。ついで将軍家千首に取材する近世期の歌書類を検討し、後代の受容実態を考察する。

第二章「室町時代公武月次歌会の諸相」では、室町期に禁裏（後花園天皇・後土御門天皇）と室町殿（義教・義政・義尚）で催行された月次歌会に注目し、両者の構成・運営実態を概観しながら相互の関係性および、この間におこった応仁の乱の影響を分析する。公武の月次歌会は、それぞれ後花園天皇（1419-1471）と六代将軍義教の時代より催行が把握されるようになる。八代義政が元服と前後して作歌活動を開始すると、後花園天皇は「禁裏外様月次歌会」を創設し、公武歌壇の協調をはかる。この体制は応仁の乱勃発まで継続するが、次代の後土御門天皇（1442-1500）・義尚には引き継がれず、以降は公武歌壇は分離し個別運営の時代となる。応仁の乱は確かに、公武歌壇の協調体制を瓦解させたという点で、歌壇史上の画期と認めうる。しかし、室町時代の歌壇運営を月次歌会から眺めたとき、例外といえるはむしろ、後花園・義政期における協調体制であり、より重大な画期と定めるべきは、これを惹起したであろう禁闕の変（1443）といえるだろう。

第三章と第四章では、後土御門天皇の禁裏歌壇で新たに恒例行事として成立した着到和歌につ

いて検討する。着到和歌は複数人が指定の場所に出向き、和歌を毎日一首ずつ、百日間詠む詠歌形式をさす。近年、資料紹介が相次いでいるものの、成立や具体的な進行等、興行としての側面については未だ不明な点が多い和歌行事である。

第三章「禁裏着到和歌の成立」では、着到和歌が禁裏の行事として成立するまでの過程を検討し、その淵源を解明する。後土御門天皇の着到和歌は、文明四年（1472）九月九日起日（開始日）のものが嚆矢とされるが、形式がある程度整備されており、前身となる興行の存在を予想させる。そこで記録にあたると、和歌に限らず諸芸を百日間継続するという行事（百日興行）が中世以降に散見される。起日は当初一定でないが、室町期には概ね桃花・重陽の節句に定められる。「百日間の興行」「節句を起日とする」という共通点から禁裏着到和歌の前身とみてよい。但し、百日興行が「着到」と称された例はなく、これは禁裏着到和歌独自の要素である。ここでの着到とは室町期に制度化した「禁裏小番」の着到（出勤簿）に由来するとみられる。小番衆が百日和歌に参加する例は、寛正六年（1465）の後花園上皇期にあり（綱光公記）、当初の「着到歌」は、天皇（上皇）が行っていた百日和歌に、小番衆が当直の日のみ詠進するという形式であったことが判明する。これを参加者全員が百日百首を詠むという興行に再編したのは後土御門天皇であり、その意図には、廷臣の内裏祇候の頻度を上昇させることで、応仁の乱以後の世上不安に対応することにあつたと指摘する。

第四章「歌書本文の形成と内題における「続歌」の機能—文明十三年着到千首から—」では、文明十三年（1481）九月一日より禁裏で開催された着到千首和歌の歌書面を検討する。本着到は「文明千首」とも称され、着到和歌であるとともに千首和歌の側面をも有している。草稿本、詠進短冊から転写本、部類本にいたるまで、ほぼ全ての段階の本文が現存しており、歌書本文の形成過程を追究するに有効な資料といえる。まず、現存諸本を形態毎に掲出し、このうち新たに見出された清書本（短冊の寄書原本）である宮内庁書陵部鷹司本（函架番号：鷹・647、「〔点取〕続千首和歌」）を詳しく紹介する。ついで各段階の本文の形態を相対化し、特に清書本と転写本系の関係性を分析する。両者の本文を精査すると、通常想定される「清書本→転写本」という順序とはことなり、転写本系の本文が清書本に先行することが明らかになる。成立当時の記録には、清書本の前段階に位置する「中書本」の存在が示されており、この中書本こそが、転写本系の共通祖本であることを指摘する。その上で草稿本から、部類本に至るまでの本文の形成過程を復原する。

ついで清書本のみに見える「続千首和歌」という内題に注目し、その意義を検討する。「続」の文字はこの興行が「続歌」であることを示すものである。これを踏まえて続歌の定義を検証すると、室町期においては従来指摘されていた「当座性」は必須の要素で

なく、むしろ「定数歌題を複数人で分担して詠む」という点が続歌の主要素と認識されていたことが明らかになる。また、現存する続歌の寄書原本を参照するに、多くが無記名であり、批点に供されることを主眼とした写本であることが指摘できる。そしてこれを内題にて示す意味は、それが点者の手に渡った際、個人の定数歌であるか、複数人による続歌であるかを示すことにあった可能性を指摘する。

以上、各章の要旨を述べた。本論文は室町殿をはじめとした政治権力と和歌との関係性を考察し、和歌の社会的意義・機能の解明を目指したものである。これによって、直接には、近年大いに注目を集めている室町時代の政治史・文化史研究への寄与を果たすとともに、より広くは、中世和歌史の基礎的な問題についてもいくつかの新見をもたらしていると考えられる。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number	<input type="checkbox"/> “KOU” <input type="checkbox"/> “OTSU” No. _____ <small>*Office use only</small>	Name	Hajime Kawakami
Thesis Title			
室町殿歌壇の研究 Research on the Poetry Circle of the Muromachi Shoguns			
Thesis Summary			
<p>This doctoral dissertation investigates from different perspectives the poetic community that flourished around the “Lords of Muromachi,” the heads of the Ashikaga shogun family and the highest authority during the Muromachi period.</p> <p>The thesis consists of three parts and ten chapters. In the first part, I focus on the literary production of Ashikaga Yoshimasa (1436–1490), the eighth Muromachi shogun. Chapter 1 collects Yoshimasa’s extant waka and sheds light on his life as a poet. Chapters 2 and 3 are devoted to Yoshimasa’s <i>jikaawase</i>—a compilation of his own poems arranged in pairs to form a solo poetry contest—and two of his private collections. I determine which textual variant is the most suitable for further inquiry, and based on these results, I attempt a diachronic study of Yoshimasa’s poetics in Chapter 4, examining how his style changed in relation to age and social environment.</p> <p>In the second part, I tackle the poetic network of Seigan Shōtetsu (1381–1459) through the scrutiny of <i>Shōgetsuan eiga shijūniban utaawase</i>, the record of a poetry contest preserved at the Tenri Central Library. Shōtetsu is one of the most representative poet-monk of the Muromachi period, also known for lecturing the young Yoshimasa on <i>The Tale of Genji</i>. Since <i>Shōgetsuan eiga shijūniban utaawase</i> is a hitherto-ignored manuscript, I provide a basic report of this finding in Chapter 1. In Chapter 2, I move on to the analysis of the poetry contest itself and look closer at the participants and their poems to gain a clearer picture of Shōtetsu’s circle, of which much is still unknown.</p> <p>The third part addresses various issues related to the warrior milieu of Yoshimasa’s son, Yoshihisa (1465–1489), and the adjacent entourage of Emperor Go-Hanazono (1419–1471) and Emperor Go-Tsuchimikado (1442–1500). In the first chapter, I reconstruct the formation process of Yoshihisa’s literary community using as a clue the <i>Shōgun-ke senshu</i>, a one-thousand poem sequence hosted by Yoshihisa in the eleventh month of Bunmei 14 (1482). In the second chapter, I pay attention to the monthly poetry gatherings held at the imperial palace and the shogunal residence in the fifteenth century, detailing the nature of such events and the people involved, as well as their interactions. Additionally, I consider the effects of the Ōnin War, which broke out during the same period. In Chapters 3 and 4, I discuss a new annual event established under Emperor Go-Tsuchimikado’s reign, namely the <i>chakutō waka</i>. Chapter 3 delineates the how this practice became a court tradition, while Chapter 4 explains the modes of inscription and transmission of <i>chakutō waka</i> texts using the <i>Bunmei jūsannen chakutō senshu</i> as an example.</p> <p>Overall, this study aims to rethink the relationship between poetry and the political power of the Muromachi shoguns, thereby gaining new insight into the social meaning and functions of waka.</p>			